外国書講読担当教員としての回顧とゼミ外書研究導入について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政治経済学部 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯沼, 博一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10173

外国書講読担当教員としての回顧とゼミ外書研究導入について

飯沼博一

明治大学政治経済学部で初めて外国書講読を担当したのは、一九七一年（昭和四六年）であるから本年ではや二三年にもなる。

開講クラスは、三年次生、次の年は持ち上がり四年次生というローティションで現在迄同じであるが、当初はなんだかんだで、一クラス八〇名以上の学生を受け持っていたことを思い出す。

この大勢の学生を一時限、九〇分の間、どのように授業に引き付けられるか、そのための導入方法・展開・終結を如何にあるべきか、考えたものである。

そこで一・二年次、和泉の教養課程で、学生が学んだ経済学の基礎関連科目をベースに経済英原書を選び、それも本務校での外書担当の経験上出来るだけ翻訳のないものを心掛けることにした。ともかく八〇名の学生を全員参加させることにある。

さて講読の授業を進めて行く中で、問題として感じたことは、当時の学生の語学力が、力のある者と、ない者の格差が非常にあったことである。したがって、名詞、代名詞、形容詞、副詞、動詞など煩雑な文法用語について、多くを学生に説明しない方が良く、必要最小限の用法と文型の基本を述べることが、英語に対するアレルギを誘発しないことを知ったのである。

そのかわり、あらかじめ彼等に一冊のノートを用意させ、英和の辞書を引かせ、ノートの左側の頁に、英文中の判らない単語を発音記号、品詞、訳1、2、3（派生語）を含め書かせることにした。

私としてはまず英外書の各章ごとに書かれている内容の大意を説明する。おおよそ、B5版、約二頁強の進度

で一時限を消化していくことを述べ、その範囲で学生各自が予習すること。そのために英文を一通り目を通して、全体の雰囲気をつかむよう心掛けること。経済用語とりわけ熟語は、辞書に適当な訳がしばしば出ていない場合があることから、語彙をよく調べ、文脈からみて原文の語彙に相当すると思われる日本語を考えてみること。考える手立てとして教養課程で先生方から学んだ経済関連の参考書を復習してみること。以上のことを踏まえ、ノートの右側の頁に、直訳でもよいから一応各自が日本語に訳したものを記録し、授業に出席するよう指導したのである。

授業の展開に当っては、各時限、学生名簿順に、各センテンスごと一名づつ、英語を読ませ、前述の予習の結果を背景に日本語にしたものを報告してもらうことにした。勿論、その訳し方の度合でA・B・Cの評価をそのつど出席簿に記録し、その上で私が学生の訳を補完することを日常とした。

その結果、私の授業運営上の目論みに対して、学生の、大方は、当日、自分の当りそうなセンテンスの前後の範囲で勉強してくるということで、実は、クラス全体の出席率が非常によいと言うことになったのである。何故なら、学生のうち誰かが授業を休み、穴をあければ、受講生全体に迷惑をかけることになり、彼等自身の間での無形の掟が働くからであろう。問題があるにせよ、その上で、前・後期に筆記試験を課し、各期末、彼等の書いたノートを提出させ出席回数を含め、最終評点をつけたのである。

そのような大勢の学生を擁した時代も一九八五（昭和六〇）年頃迄に受講生が徐々に少なくなり、昨年は五六名迄に減少した。しかしそのおかげで授業の中で原書を和訳し、その文意の背景、例えば歴史・理論・政策を説明する時間の余裕が一層できた。

ここ十年、受講生総体の語学力が飛躍的に向上したことも幸いしている。勿論、政経学部に入学する学生の語学面での質の高まりと学部当局のご尽力によるところが大である。

しかも本年に入って学部のカリキュラム改革があって受講生が三一名にも減少した。クラス構成は、主にゼミに入らなかった一般学生および体育諸クラブなどに参加している学生であり、総体の実力にばらつきはあるが、教員の立場からすれば、やり甲斐のある学生数である。

一方、本年からゼミ外書研究の導入によるゼミ生の反

応であるが。そのことを述べるには先ず私のゼミ運営について若干説明しなければならない。

週二時限という限られた時間を従来から、三・四年次生合同で行って来ている。理由は兼任という私の立場もあるが、三・四年次生の先輩、後輩という縦軸と同輩という横軸がうまくかみ合えば、研究・発表・質議応答など相乗効果があるからである。現在三年次生の共通論題Aグループは、「中国経済の現状と展望」で、12月17日、関東学生貿易学会大会（明治大学十一号館）で報告し、学会誌にその論文が掲載された。Bグループは「東南アジア経済（貿易）の現状と展望」で来年の政経セミナーに投稿することを目的としている。四年次生は、各自、卒業論題を三年次後期に設定し、現在、ローティションで中間報告した成果を卒業論文（四〇〇字百枚以上）としてまとめている。

したがって、英外書は時間的余裕がないこともあって、一九七二年からこの四・五年前迄は、ゼミ三年次生を対象に私の外書講読の授業に出来るだけ参加させてきた。しかし、このところカリキュラム編成上のこともあってそれが出来なかったのである。

本年から一時限をプラスして頂き、ゼミの中で外書研究の時間が設けられるようになった。彼等が論文を書く上で原典に触れる必要性から、その時間が公けに認められたことは意義深い。彼等自身、様々な問題をかかえ拙宅に通う時間が多少でも減ったことを喜んでいるようである。ここ二・三年、学生の反応をみてみたいと思っている。

付記、現在外書研究に四年次生も参加させている。

一九九四年十二月　記

（和光大学・本学兼任講師）